

平成二十五年十二月十六日

原子爐技術の最大の難問は使用済燃料の最終處分にして、特にアメリカシウム、キュリウムなど超長半減期高レベル放射性廢棄物は現在の所、地殻の奥深く數萬年の保存を要すといひ、世界各國その處理に苦惱す。

こゝにフィンランドその地下貯藏施設の建設を始め。同國は國家の獨立を擔保するものとして、エネルギーの自給を進め、原子力の比率は三分の一に達しをり。その使用済燃料の最終處理も他國を頼らず、自國にての處理を決斷、オンカロ (Onkalo) 計畫として平成三十二年 (二〇二〇) 稼働開始を目指す。完成せば爾後百年處理可能と云々。

前首相小泉純一郎氏このオンカロを視察、歸國後斯る計畫我が國にては實施不可能として原發の即時廢爐を提唱す。メディア忽ちこれに飛付き、報道番組、新聞紙面擧げて賛意を表し、反原發ムードを盛上ぐ。小泉氏を稱揚する「街の人」頻りにテレビに登場し、同氏に追從せざる安倍首相を暗に批判す。

原發の是非は暫くこれを措くとも、小泉氏のいふオンカロ計畫の如きは我が國にては實施不可能なりとの説そのものには大なる疑問あり。根據明示なきも、考へ得る理由は二つあり、一つは斯る計畫の實施に賛同する地域なく、他の一つは我が國の土木技術の不足ならむ。前者は詳細なる建設候補地の選定を行ひ、地元を説得するが政治家の役割に非ずや。又後者も最近トルコのボスポラス海峽の海底トンネルも我が國の大成建設これを開鑿完成せしめたるはフィンランドに優るとも劣らざるに非ずや。惜しむらくは、發信力拔群の小泉氏にしてオンカロ計畫へのフィンランド國民の決意に對する敬意と共にこれを紹介せば、よもやこれを「検討の要なき計畫」との誤解招かざらまし。

人或いは言はむ、假令オンカロ成功すとも、半減期數萬年に比し、僅か百年にて終らば、次々と處分場を要し、人類の負擔に堪へざるべしと。放射性廢棄物は原子核の周圍にて各種の粒子の衝突によりて謂はゞ人爲的に發生するものなれば、その衝突の特性を利用して、最終廢棄物を短半減期低レベル放射性的のものに制御する技術不可能に非ずと思料す。この夢ある技術開發は今後百年の間に可能ならむも、なほ原子爐の操業を通じての絶えざる工夫、改良の結果なるべし。「廢爐」に拘り、我が國これに参加せざれば、世界の潮流に後れ、エネルギー後進國の不利を甘受するの餘儀なきに至らむ。

振返りて惟ふに、ニュートンの力學に基く工業技術はその携はる人數も多く、世間の常識として學習せられ來るに、量子力學以後の原子力技術は従事人口も未だ少く、特に數學的取扱の難解化により、一般教養としての學習すら困難となりつ。知識の及ばざるに乗じて世を欺き、國を殆くするの輩猖獗するは歴史の示す所、幸ひにコンピューターグラフィックスの發達あり、これのテレビへの活用により原子核物理學への理解を深め、良識ある合理的議論の發展を待望す。